

蛾

室生犀星

青空文庫

お川師堀武三郎の留守宅では、ちようど四十九日の法事の読経も終つて、湯葉や精進刺身のさかなで、もう坊さんが帰つてから小一時間も経つてからのことであつた。表の潜り戸が軋むので、女房が立つて出て見ると、そこへ、いま法事をあげたばかりの武三郎が、くぐり戸から四十九日前に出たきりの川装束で、ひよっこり這入つて来た。

心持のせいか髪も濡れ、顔も蒼ざめていた。おあいは、吃驚しすぎて、声も出ないで凝然と見成つていた。が、すぐに自分の夫であるかどうかさえ気疑いが起つていちどきは悪感をさえかんじた。

「いま帰つた。どうしたんだ。この線香の匂いは――。」

堀は、すぐ玄関から匂つてくる青い線香をかいで、ふしぎそうに言った。おあいはその声音にやつと気を鎮めることができた。

「お前さんが出ていらしつてから今日で四十九日も便りがないのだもの。ほんとに何処へ行つていたんです。」

おあいは、洗足するとき、夫の草鞋わらじがすり切れて、足袋の裏まで砂利じやり擦れがしているのを見た。

「これには色々話がある。あとで話すとして——。」

堀は、座敷へあがると、仏壇の間の灯や精進料理の仏膳が、さびしい白飯の乾きを光らせて供えられているのを見た。そこには、かれの法名と、四十五歳五月生れと、はつきりと新しい位牌さえ収められてあった。

「うむ。」

堀は、吐息をついて、ぼんやりと何か頻しきりに考え込んでいた。

「ほんとに何処へいらつしつたんでございます。」

おあいは、夫が殆ほとんど見ちがえるほど憔悴やつれはてたのを、その頬や腰のあたりに見た。それより目がどんよりと陥おち込んで、ちからのない弛ゆるみを帯びていること、ものを正視するに余りに弱くなっていることに感づいた。

堀は、手で話しかけてくれるなど言つて、非常に疲れきって床の上にやすんだ。それきりかれはうとうとと眠り込んだかと思うと突然起きあがって、おあいの顔を凝じっ乎とながめ

たり、ぼんやりした行燈あんどんをみつめたりした。そして気がつくと、

「仏壇のあかしを消してもらいたい。」

そう言い出した。おあいは立つて、手扇ですぐ消してしまった。あとは、お暗い行燈ばかりで、そとは、すぐ田圃たんぼつづきのかいかいいう蛙の声が、いちどきに大方今夜も晴れて
いるらしい星空に向つて、遠くなったり近くなったりして起つていた。

おあいは、又しつこく訊ねたが、堀は、混み入った数を算かぞえるときのような空目をしながら考え込んでいたが、幾度も吐息をついて手をふつて見せた。

「おれ自身にもわからないんだ。たしか六月一日に出かけた覚えはあるが……。」

おあいは、その日裏の桐がはじめて花を抜き出したことを、門口で堀がそう言ったことを注意した。

「うん。それから——。」

かれは、いつもの場ン場の大桑村の淵へ出かけた。犀川さいかわの上流で、やや遅れぎみの若葉が淵の上を半分以上覆いかぶさつて、しんと、若葉の風鳴りがすると、それにつれて、淵の蒼い水面に鱗がたのさざなみが立つて、きゆうに涼しさと寒さが一いちどきに体温たいふにかんじられた。ふしぎに淵の水面というものは、流れがなくて、底へゆくほど流れが重かさりか

かっていること、わけても大桑の淵にはそれが著しかったこと、その日は鱒を料亭から受け合つて捕りに這入つたことなどを思い出した。

「ともかく大桑の淵へ潜つたことは實際だ。あそこは毎年鱒時にははいるので不思議なことはない筈だ。」

かれは、そう言ううちにも、ごろりとした底ほど冷切っている水肌を、いまもからだに感じた。岩と石とからなる淵は、表面からは傘をひろげたようになっていて、ずっと岩石の底まで淵がつづいて、そこは、ながれの方からひとりでに射してくる明りが、ぼんやりと見えるだけで、まるで暗かった。岩から沁み出る清水の冷たさも加わって、踵がいちばんさきに痺れるのが常であつた。そこへは、川師仲間でも誰も潜ってゆかなかつた。というのは、潜りがきいても、流れへ出るまで大概のものは呼吸がつかかなかつたからである。それゆえ、堀は、ほとんど自分ばかりの場ン場にしておいた。鮎どき、石斑魚時、また鱒や鮭の季節も、そこを一と潜りすればよかつたほど、いつも捕れた。それは、それからさきの上流へ登るために鮎や鱒がしぜん溜るようになっているのである。

堀は、そこへ潜入つたことと、いつものように鱒を手網で三四本も掬い出したことを思い出した。そして淵を出ようとしたとき、つかまつた岩がつると動き出したように思わ

れた。その岩は何時いつも淵穴を閉じている大亀だったことを思い出した。

「あれなら……。」

堀は、そこで亀のことを思い出して微笑ほほえんだ。おあいは、じつと堀を恐いもののように見つめていた。起きて何か考えるかと思うときゆうに微笑わらい出したりするのが、くらい行燈のかげになつて無気味だった。

堀は、間もなく正体もなく眠りこんだ。おあいは、いつまでも、ふしぎな夫が、こうして何かの物語にでもあるように四十九日目にかえつてきたことを、きみ悪くかんじた。

おあいは、はじめて気がついて、玄関へ出て行つた。そこには、網あみだらと、手網とそ
の日の弁当と、他に焚火たきびの材料を切る鉈なたとがあつた。

弁当はつかつてあつた。手網も網盥あみだらもからからに干せあがつていた。ふしぎなことは、網盥あみだらのなかから町人内儀のつかう塗櫛ぬりが一枚、網盥あみだらをうごかしたのでかちちりと音を立てた。おあいはかつとした。わけもなく、そう一時に頭がきゆうに重くなつた。こんな網盥あみだらのなかに女の櫛くしがあるう筈がない。川漁に行つてこんな物が落ちていそうもないことだ。これは変だ。

「ひよつとすると——。」

おあいは、行燈のそばへ行つて、塗櫛をすかしてながめた。その櫛の背なかには、小さな魚族のむれが列をつくつてゐるのが、金蔴絵で、しかも巧緻に描きあげられてあつた。それから魚のつらなりは、ほそい、あるかないかの線状からなり立つて、ぴりぴり顫ふるえてゐるようだった。櫛にしては珍らしい絵で、その上、おあいが鼻のさきへ持つて行つて鼻かごうとしたが、一向いつこうあぶらの臭いがしなかつた。なんだか水苔のような、じめじめした匂いが湿つて鼻孔を圧してきた。女のものなれば香料の匂いがする筈だ。それなのに、一向それがしない。

おあいは、永い間、行燈のそばに坐つて一枚の櫛のうらと表とをすかして見ていた。堀は、静かにねむつていた。蒼褪あおぞめた顔は小さく寂しげにやつれきつていたのである。

「おあい。」

そのとき夫は寝がえりを打つて不図ふと目をさますと、こう呼んだ。おあいは驚いてその櫛を膝と膝との間に入れた。

「まだ起きていたのか。」

「ええ。」

「いま何かおれが言いはしなかつたかね。大きな声で。」

「いいえ。」

おあいはい、坐ったまま、背後へそう答えておいて、膝をもじもじさせた。見られはしなかつたかと気になったが、間もなく夫はすやすやと眠りはじめた。

櫛は、ほんのりと体温であたためられて、それが却かえつて自分の体温ではあつたが気味がわるかつた。おあいはい、うとうとした。遠蛙がやはり皓こうこう々と鳴いていた。

そのとき表のくぐり戸をしずかに叩くものがあつた。いまごろ来る客はなし、と、おあいは起きあがろうとしなかつた。けれども、潜り戸がしきりに叩かれた。気のせいではなく、どうやら訪ねてきたらしかつた。仕方なしに、おあいはい手て燭しよくを点ともして、夫が目をさまさないように、そつと玄関から前庭へと出た。

「ただいまお開けいたします。」

おあいはいが恚こういうと、そとでは、静かに音もしなかつた。が、やさしい女らしい声で、透きとおるように言つた。

「夜中おさわがせいたしましたして相すみません。じつは。」

潜り戸ががっちり開いた。おあいはい、手燭で往来の方をてらした。そこには、町家の内儀らしい女中が白い顔をほんのりと浮しながら佇たたずんでいた。

「寝入りばなだつたもので、つい、おまたせして済みません。いまごろどちらからいらして——。」

おあいは、内儀の顔があまりに鮮かで、美しく整いすぎているのに、ひやりと、心臓のあたりをひと撫でせられたようで、小震いをした。髪の毛も、高い鼻がなまなましく細づくりで、それが、一番はじめに目にはいった。

「ちよいと手燭をかして戴けないでしょうか。大切なものを取落しましたので、」内儀は、そういうと足もとを捜しはじめた。

「それはお困りでしょうに、お品物は何でございますかしら。」

おあいは、落し物なら夜中に起きなくともいいのにと、ふいに、内儀のうつむいている腰のあたりを見ると、金繡のある立派な夏帯の上に、どこからきて止つたものであるか、一疋の灰びき白ほのしろい毒々しい夜の蛾が、ぼんやり手燭にぼやけて烟けむつてみえた。

「申しあげるようなものでございませぬ。たしかこの辺でしたが。」

内儀は、土塀つづきの小石垣の横合を、夜湿りのした地面の上から探してあるいた。古い城下の、椎しいや榎えのきやタモの大木のある裏町には、星ぞらがともすれば蔽おおわれがちで、おけらがぶるぶると、溝どぶ汁じゅうの暗い片かげに啼ないでいた。

「たしかにこの辺でしたが、こうずうつと行きますと、ぱたりと落しましたので——。」

「お気の毒な、もしや溝のなかにでも飛んだのではございませんか。」

「いいえ、たしかに地面の上でございましたよ。ぱたりと。」

内儀は、うつむきながら、だんだん、溝づたいに、こんどは堀のくぐり戸のそばまで来たが……足を停めた。

「ふしぎなことがございますのね。たしかに落したものが見えないって——。」

おあいは、すこし寒気がした。内儀も捜しつかれて、

「では明日昼のうちにも、小僧に見に来させますからどうかお休みになって——どうも夜中おさわがせして済みません。」

「いえ。わたくしの方でも気をつけて見て置きましょう。」

おあいは、そう言つて潜り戸の方へ寄つたが、内儀は低い声で、

「もう幾つでしょうか。」

「九つをもう廻つたでございましょう。ではお休みなさいまし。」

内儀は、暗い裏町を歩いて行つたが、気になっておあいは潜り戸から顔を半分出して、暗いなかにもつと暗みある影を眺めていた。いったい何を落したのか、それも言わないで

夜中に変な人だと聞^{きき}耳^{みみ}をすますと、もう小路を曲つて行つたのか、足音もしなくなつていた。

玄関の引戸を引こうとすると、白い蛾が、さっきの蛾かも知れないやつが、ぱたぱた、手燭の方形に吐き出したあかりをぐるぐる廻つた。

「しっ。」こんどは、襟首にきた。

しかたなしに手燭を吹き消した。もとの行燈のところへくると、はじめて、はつと気がついて帯の間に手をいれてみると、さっきの櫛が失われずにあつた。その瞬間におあいは思ひあたって吃驚した。それと一^{いっ}しよに、寒さと震えが齒と膝がしらへしがみついた。

「しかしそれは気のせいになちがいがない。まさかあの内儀ではあるまい。」

おあいは、細帯一つになつて、燈心をほそめ、櫛は、行燈台の小抽斗^{こひきだし}にいれた。そして床にはいったが……そのとき、ふいに目をさました。

枕もとには、れい^{いびき}の行燈がぼんやり点れたきりで、堀も、深寝をしているらしく、寝^{いびき}さえかかなかつた。惶^{あわ}てて行燈の小抽斗を開けてみると、寝る前に入れたとおりに櫛がしまわ
れてあつた。

堀は、やつと床から起きられるようになってからも、一日ぼんやりとしていた。川へは一切漁に出かけることもなく、鬱々として何を言っても確かな返事さえもしなかった。ふしぎな四十九日間の外出が、おあいには少しも分らなかつた。

ただ、閑暇ひまさえあれば、堀は、家じゆうを捜して歩くか、庭へ出て樹の根もとにしゃがんで、茫然と空を眺めているかして、埒らちもなくぼんやりしていた。漢医にきくと、何か憑つきものがしているとだけで、細かい病状が分らなかつた。

不思議なことは、そのころお城下はもちろんのこと近在に至るまで、夜になると、野犬の群がうすぼんやりした月夜のけむったなかに、びようびようと吠えたけつていた。そういう晩になると堀は、きつと庭さきへ出て、永い間躡しゃがんでいるかと思うと、両手を地に突いて、やはり野犬のような吠え声を出した。それは決まって月夜で烟つた晩で、きまつて堀は誘われるように夜啼きをするのだつた。あおいも、初めのうちは気味悪く思ったが、慣れると、しかたなく裏戸を開けて、浅間あさましい夫のそういう姿を青い庭木の間にながめた。堀はただそういう一時間ばかりの発作が済むと、夜露でぬれた髪をしたまま、もとの居間

へかえつた。ぐつたり疲れて、永い睡眠がいつも決まって発作のあとからしてくるのが常であつた。

おあいは、堀がたえ間なく櫛を捜していることを勘づいていたが、なるべく目にふれないようにしておいた。れいの内儀も、あの晩きり尋ねてこなかつた。おあいは、このふしぎな櫛たんすのなかに収しまつて、再度と取り出して見ようとしなかつた。

或る静かな、まだひどく暑くならない午前のことだつた。おあいが、ふと庭に出てみると、堀が何時ものように杏の根もとにいたが、ふしぎに垣外に一人の女が立つて、杉の新芽立ちの間から庭中を窺っているようだつた。よく透してみると、背中に汗のするほど驚いたのである。それは、いつかの晩の内儀でやはり町人づくりの派手な塗下駄で、日傘を差していた。

堀は、ふと目を垣そとに遣つたが、これも不思議そうに、木のあい間から透しながら歩いて行つた。顔だけを差し出した妙な寂れた堀の姿は、激しい初夏の光のなかに静かすぎるほど濃い影を地にひいていた。

「ちよいとお尋ねいたしますが、そのちよいとばかり——。」

その声は、きき覚えがあつただけ、おあいはぎくりとした。やはり、いつかの晩の女に

ちがないと、そう考えると、そつと庭木の間から身をかく匿した。

堀は、ぼんやりと盲人のような歩き方をして、耳をかたむけたが、何も返事をしなかった。

「お尋ねいたしたのでございますが。」

又そういう透き徹った声が出た。堀はそのとき既に垣一重隔て立っていた。

「ご用向きは——。」

堀の顔は、ふしぎそうに、例の、生々しく美しい鼻を眺めた。

「先日から少し落しものを致したので尋ねているんですが、そのかいもなく判りません。」

「はあ、落し物をな。」

堀は、考え込んで、それきり立つて動かなかつた。

「もしお宅のお庭にでもないものかと存じまして——。」

内儀は、垣のそこから微笑んでみせた。それが堀には何処かで見たとある微笑みのように思われたが、どうも覚えが出ない。手を拱くんで考えているうち、内儀の日傘の上に日かげが移っていた。

おあいは、そのとき直ぐに垣のそばへ寄ると、内儀はていねいにあいさつをした。そして、

「先夜はおそくまでおさわがせして相すみません。」

そういうと、又静かに微笑つてみせた。おあいは、この不思議な内儀と、堀の病気が係わっているように思われてならなかった。

「お話ですと家の庭にでも落してないかと仰おっしや有いますが、そういうものは一向に見当らないでございますよ。」

おあいは、堀の家にはいつて休むように言ったが、やはり動かないでいた。

「何か御病気にでも……。」

内儀は、堀の顔をみて、おあいにそうたずねた。

「ええ、すこし気鬱病でございましてはかばか挨拶はかばかしく参りません。」

「それはお気の毒な。」

内儀は、そういうと、一と足さがつて歩き出して行った。堀は、裏門からこつそり出て、杉葉垣のしずかな裏町を、ほどよい朝しめりのした道路に水々しい影をおとしてゆく内儀の姿を見送っていた。おあいも、そこに立っていた。が、内儀はいちども振りかえって見

ないで、もう町かどを曲った。と、堀は、さつきから張り詰めていた気のせいで、ぐったりと発熱の勞れつかを感じた。

三

ふしぎな朝がほとんど毎日つづいた。堀は朝になると裏門の庭草の茂りのおかげに跣うずくまつて、柔やさしい足音を待っていた。その時刻には黒い日傘をさした内儀が、ときには浅草草履を引つけて、しんと、音もない裏町をやってくるのである。何処からくるのか、その時刻になると気のせいか若葉まで静まって、長い裏町に子供のかげすらないほど閑かんじゃく寂としていた。

堀は、生垣の裾漏すそもれから裏町を窺うかがっていて、内儀がちかづくと、しずかに立ちあがるのが常であつた。

「すこしお尋ねいたしますが。」

内儀は、きまつてこういうと微笑んで見せた。堀も、まるでその言葉を合図に微笑みをかえすのである。堀は、そういう一日ずつが経つてゆくごとに内儀の顔がずつとさきから

心の中に生きていたことを朦朧もうろうとして意識のなかにも感じた。どこかであったことがあると思つても、その意識はすぐさま錯然さくぜんとして混乱した。

「おあいさんは今日はおいでじゃありませんか。」

「おあいは勝手でしょう。」

堀は、そういうものに答えると、女はしずかな声を立てて微笑う。堀は、内儀の、白味がちな目をみつめてみると、しんとした気になつて、からだを羽毛か何かで撫でられているような恍然うっとりした気もちになつて了しまうのだつた。内儀は内儀で、その目の光を艶やかにそつと微笑ませながら、そつと惹きよせるように、堀の目のなかに、目に見えない温かいものを一杯に注ぐようだつた。堀は、うっとりして、その美しい目をからだ一杯に浴びていた。

「落し物は——。」堀は、いうことがないと、こう尋ねてみたが、内儀は、そのたびに寂しくわらつて見せた。

「なかなか見つきりはしません。」

内儀は、織ほそい美しい手を垣根の青い茂みに与えているのが、堀には、あまり白く鮮明で、鋭くなつてみえた。が、その上に自分の手を置くことができなかつた。

そういうときは決まって、おあいが勝手から出て来た。そしてすぐ、堀を庭から家へ入れようとした。そして内儀も帰すようにした。

「何か御用で……。」「おあいは、堀と内儀との間に、立ちはだかつてこう言くと、内儀は、ちよいとあか赧あかくなつてもじもじした。

「いいえ、何も。」

「それならずつとおかえり下さいまし。夫は氣鬱病ですし、あまり永く庭へ出ていとよくないものでございますから。」

おあいは、そう厳しくいうと、内儀は、せんかた詮方せんかたなさそうにすうと垣根をはなれた。堀は、おあいの姿をみてから小さくなつていたが、それでも、内儀のあとを見送っていた。

「厭な女もあればあるものだ。毎朝のようにやってくる。いったい何の用事があるのだらう。」

おあいは、独り言をして、堀を家のなかへ入れようとした。が、堀は、頑固に跼んでじつとしていた。

「おれはまだ此ここ処こにいるのだ。」

おあいは、日光が蒸しついてくるので、頭によくないと言って、

「居間で一と眠りなさい。だいぶ疲れていらつしやるようだから。」

と、肩に手をかけようとすると、いきなり手を払いのけた。

「此処に用事があるのだ。」

「どんな用事があるのでございます。」

堀は、それには答えないで、れいの、しきりに手をさしのべて、指折りかぞえていた。何をかぞえるのか、かれは、ひまさえあれば蒼白い指さきを折って、口のうちに、ぶつぶつ言いながら日曆を繰るよう^にしていた。おあいは、それが五本ずつ九度折って、あと四本だけを折るのを毎日のように眺めた。やはりあの四十九日間に何事か起つたに異^{ちが}いがないと思つても、やはり解らなかつた。たしかに彼の女がかかわっているのだ。それだけの見当で、それ以上おあいにも堀にもわからなかつた。

おあいは、そういうときに、れいの櫛のことを話した。櫛を拾つたことがあるかとたずねても、やはり頭を振つていた。

「櫛。ふむ。」堀は、口へ出して言つて考え込んだが、表情はべつに乱れもしなかつた。おあいには、しまいには何が何だか分らなくなつていた。

夜になると、堀は庭へ吠える真似をしてたが昼のうちはあまり発作がなかつた。ただ毎

朝のように、れいの、内儀がやって来た。そのたびに堀は裏門を出てゆくことがあった。或る日、それも朝のうちだった。やはり庭にいる筈が突然いなくなった。いつもくる内儀がもう何時の間にか来て行ってしまったあとなのか、姿も見せなかった。

おあいは、裏町から通りまで探したが、一向堀らしい姿が見えなかった。が、次の日になっても堀はかえってこなかった。

おあいは、昼となく晩となく、河べりをさがしてあるいたが、どこにも堀らしいものがないかった。そのときおあいは何心なく不意に例の櫛のことを思い出した。そして箆笥をしらべるといつの間にか櫛は失われて了っていた。

おあいは、犀川べりの大桑の淵へ行つて、そこで堀が漁をしにでかけてから不思議があったのでともかく、淵へ出かけることにした。

大桑の淵は、どす黒いまでの濃霧が覆いかぶさつて、一すじの水さえ動かなかつた。しんとした水の上に、すういすういと走る水馬あめんぼが、水流を曳すべいてすべっているだけだった。

おあいは、そのとき不意に卵の花がこんもりと腐くされているかげに、れいの内儀のさした日傘が、すぼめたまま投げ出されてあつた。おあいがそれを手にとると、何も彼かも分つたような気がした。堀の物らしい遺留品とては一つも見当らなかつた。

おあいは、ぐったり疲れて草の上に坐っているうち、ふしぎに水中にちらつく或る影を見つけた。それは堀にも似ていたし、そうでない他の人物のようにも思えた。が、女の方は、どうも毎朝やってきた内儀に異いなかった。

彼女は、あまりの妬ねたましさと腹立たしきことから、手もとにあつた石を投げ込んだ。破紋が立つてそれが微笑っているように見えた。又一つ投げた。すると又微笑が水面にうかんで見えた。彼女は同じことを繰り返かえしてやっているうち、蒼然とした淵全体がだんだん広がってゆくようになって、それが次第に胸もとを圧してくるばかりでなく、ともするとからだの前めりになって仕方がなかった。反対にちからを入れれば入れる程、もんどり打って陥ち込むような気がしてくるのだった。

彼女はしまいには殆ど眩惑めまいさえかんじてきた。嘔氣はきけと目まいと前のめりだが、交かわる交る迫ってきた。淵がだんだん目の前にせり上ってくるのだった。しまいに彼女は水面の冷たさを五体にありありと感じた。

青空文庫情報

底本：「文豪怪談傑作選 室生犀星集 童子」ちくま文庫、筑摩書房

2008（平成20）年9月10日第1刷発行

底本の親本：「室生犀星全集 第4巻」新潮社

1965（昭和40）年11月15日

入力：門田裕志

校正：江村秀之

2013年11月13日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

蛾

室生犀星

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>